

ウォーターニュートラル

考え方・方針

大塚グループは創業以来、水と深く関わりをもち、生命を支える水を原料とした製品などを通じて、人々の疾病の治療と予防のみならず、健康の維持・増進に積極的に貢献してきました。そのため、私たちにとって水は大切な資源であり、その保全は世界的にも重要課題の一つであるとともに、事業の持続可能性の確保にも不可欠であると認識しています。

また、水資源は国や地域によって偏在性があり、リスクもそれぞれ異なることから、私たちはあらゆるステークホルダーと協働し、取水から排水に至る水の保全に継続的に取り組む（水を育み、大切に使い、水をキレイに還す）ことで、持続的な水利用を目指します。

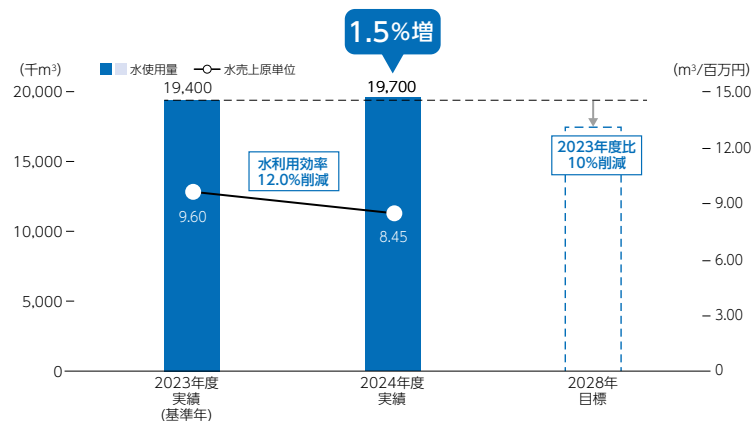


指標・目標

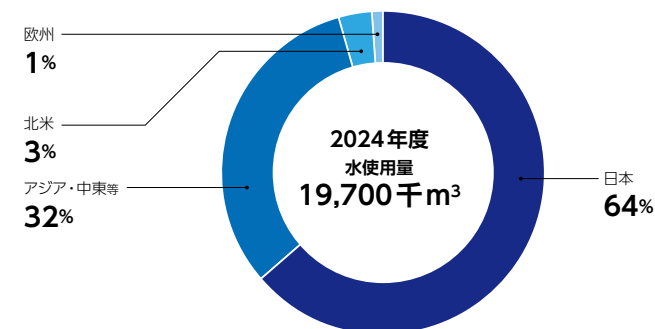
2028年 目標

- 水ストレス地域の事業拠点での水利用戦略の立案
- 水資源管理プログラムの全拠点展開
- 水使用量10%削減（2023年比）

水使用量削減目標と進捗



水使用量地域別内訳



エリア別の取水量

(単位: 千m³)

	上水・水道水・工業用水	河川水	地下水
日本	11,310	80	1,143
アジア・中東等	3,463	0	2,815
北米	560	0	121
欧州	167	2	25

取り組み

水使用量削減に向けた取り組み

大塚グループで使用する水のうち、およそ6割は日本での生産活動由来です。大塚グループでは、取水から排水に至る水の保全に継続的に取り組むため、水の適正利用に努めています。

水使用量の主な削減の取り組みでは、生産プロセスの改善や水の再利用により、グローバル全体の水利用効率（水売上原単位）は2023年度比12.0%改善となりました。一方、生産数量の増加によりグローバルで水使用量が2023年度比1.5% (300千m³) 増加しました。

生産現場での水の回収による有効利用

医療用医薬品である輸液製剤を製造している大塚製薬工場の松茂工場では、装置を冷却するために使用した水を回収することで約84,000m³の水を有効利用しました。今後も引き続き、水の有効利用を目指します。

生産拠点における水リスク評価の実施

グローバルに展開する大塚グループの多様なビジネスモデルの持続的成長には、地域ごとの環境リスクへの考慮も重要です。水資源については世界資源研究所（WRI）が開発した水リスク評価ツール「Aqueduct」で大塚グループの生産拠点を評価しており、Baseline Water Stress*の指標においては「Extremely High（非常に高い）」に該当する拠点がアメリカ、インド、スペインの7工場であることがわかりました。

大塚グループの2024年度の水使用量は19,700千m³で、そのうち「Extremely High（非常に高い）」に該当する地域の水の使用割合は7.4%、現時点で表面化しているリスクは発生していないことを確認しています。引き続きこれらの工場におけるリスクの詳細を現地子会社とともに精査し、さらなる調査を進めていきます。

大塚グループでは、水資源のサプライチェーン上におけるリスクを把握するため、国や地域で定められた法令・条例の遵守はもとより、水管理項目および管理基準を定めて運用する「水資源管理ガイドライン」を策定しました。全生産・研究拠点において、取水から排水までの水量および水質をモニタリング・管理することで、各地域における水資源管理の強化し、持続可能な水の利用を目指しています。

* 利用可能な水資源量に対する人間や生態系の水需要量が不足している状態を意味する。水不足だけでなく、水質や水へのアクセスなども含まれる

■ Aqueduct 水ストレスマップと大塚グループのエリア別水使用量割合

